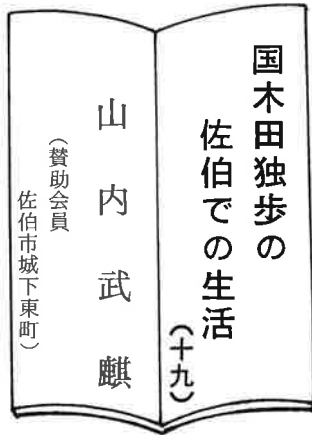


その頃の佐伯には独立した教会堂はなく新屋敷の或民家を借りて仮の教会堂にあて、時々大分から宣教師が来て布教伝道に当たっていたのである。信者は極く少数で、その少人数の信者が集まって讚美歌を歌い祈禱を捧げて互いに感話をしていた。独歩は殆んど出席して感話し、會員を励ましていた。

その頃の佐伯では基督教徒を耶穌耶穌と呼んでさげすみ嫌う人が大部分であった。学校の教師でありながら耶穌であると、独歩は町民から白い目で見られたのは止む得ないことであった。

当時の鶴谷
学館の生徒は
年下の者は高
等小学校を卒
業したばかり
の十五六歳の
者であり、上
のものとは各々
職業を持った
二十四五歳の



者で、中にはもっと年嵩の者もいたらしい。平均十八九歳の血気盛んな青年たちの集まりであったので、不平不満を押さえ切れず、そしてその中の一人が火をつけたのである。そしてその火の手はまたたく間に広がり大きくなっていたのである。

この勧告書を投げ込んだ張本人は、実は石丸ではなく藤田連次郎という生徒であったと言われている。この藤田は後に「佐伯新報」という郷土新聞を発刊した。また佐伯町会議員に選出されていた。

また、石丸は名は敏一といい、紫水または蒼鷹と号していた。長じて佐伯高等小学校の教員をしている時、大分県管内の地理歴史を歌い込んだ新体詩を作り、それが広く県下に流行したことがある。その後上京して近事画報社に入社し、独歩の部下として努めたこともある。この石丸が独歩の没後、その追悼文として書いた「佐伯時代の独歩」と題する文がある（独歩全集十巻所載）。この文には佐伯に於ける独歩の生活ぶりを詳細に書いてある。しかしその中に自分が勧告書の張本人と独歩から誤解されてなじられた恨み言は一字も書いてない。その中に独歩が佐伯に着任して生徒に向かって言った言葉の中

に「青年諸氏、予は諸氏の師たるがために来たのでは無い。予は諸氏と共に勉強すべく、佐伯に修養に来たのである」と言つたと記してある。独歩が佐伯に来たのは自分の生活の為に来たのに相違ないが、勧告書にあるように「自分のために八分、学生の為めに二分」と言うのはその主旨が大きく異なる。独歩は生徒と共に仲よく勉強しようとして生徒を励ましたのである。

このように勧告書の張本人を石丸と決めつけて激しくなじつたことから、反感組の反感を益々加え事件は大きくなつていったのである。十日の記に石丸をなじつた後で、反省し心を痛めて記してある。

されど、吾、心を苦め、思を焦がす、畢竟何事ぞ、人事多くは理想とたがひ、吾精神万が一も行はれず紛々として空気にぐる。哀哉。

と、自分の誠意が生徒に少しも通じないと心を痛め嘆いている。

古の人もこんなことで泣き、失望した。自分の今もそうである。ああ天国はどこにあるか。無罪・光明・幸福な天国、人間が互いに相和し、共にしたい、神のもとで相樂しむ天国はどこにあるか。

ただ見るものは、茫々とした無窮無辺の自然が朝・夕二六時中自分を取り囲んでいるのを見るだけである。社会の罪悪と災厄を見よ、人の心の汚れと無智とを見よ。人の世の中は結局こんなで、われわれの生命は、ただこのような悲しいもののみであるのか、そうか、果してそうか。

自分はこれでは絶叫して神を呼ぶより外に人生の希望は全くないものと感ずる。ショーペンハウエルと共にただ人類の絶滅を望むだけである。しかし、

神在り矣、人は亡びず、靈魂は無窮に生く。善は実在なり。愛は人間の命なり。

吾、日本を神の国となさずんば止まじ。

来れ、悪。来れ、災。来れ、失望。来れ、畏。吾戦はん。

と、勇気を鼓舞している。石丸をなじつた後独歩は悩み自分の誠意が報いられないことで心痛しているが、その反面、反省して自己批判をしている。また自分の努力が足りないのだと自覚し、どこまでも自分の信念に向かって邁進しようと念じている。

十二日の記

昨日は日曜日と紀元節とが重なって休日であった。

午前は教会堂に出席

午後学校生徒が自分の寓居を訪う者が多かった。

勧告書の件を聞きつけて、所謂独歩派のものが集まって来たのであろう。

次に人間の生き方について論じてある。

利と名と慾とは人間を動かす動機である。昔もそうであったし、今もそうである。そして未来もそうであろう。

理想に生くる人というのは、利と名と慾の外に生きる動機を見出して保持している人のことである。

利と名と慾とを人間から除いたら、古木や死んだ灰と同じもので、絶望してしまう人は厭世の人、放逸な人達である。

この天地にはこの外に眞の善・美・愛・希望があり、これが活泉となり、猛火となり、信仰となり、義務となる。神を認める人は即ちこれである。次の三つから一つを選べ。

一、名と利と慾とに生くるか

一、凡てを空となし、純然たる天地の哀絶孤独・絶

望の人となるか

一、神を信じ、人間の生命を信じ、全然、義と美と

愛と希望とに生くるか

と、記してある。

次に

如何にするともしか信ずる能はず。

と、盟友古川豹造の死を悼んでいる。

凡ての過去の人々の愛も信も義も悉く土の中に帰してしまつたのか。自分は信じられない。人類は何時かはこの地上から滅するであろう。そして凡ての愛も義の悉く滅し去ってしまうのか。いやいや、信じることはできない。

天地亡ぶるも神は愈々輝かん。人は益々永遠の神の楽園にあらん。

と、信じている。

古川豹造は、今井忠治と同じく山口中学校時代の盟友であった。夭折した。

十三日の記

過去の時は塵ならんや。過ぎし時を冷嘲すれば今も

空と卑しむ可きなり。

と、過去を忘れるなど戒め、今はすぐ過去になる。自分も勿ちのうちに過去の人と同じように過去の人となる。自分の命に意味があり永遠の希望があるなら過去の人でもそうである。「時」や「死」がどうしてこの人間を塵とし、荒れ果てたものとなし得ようかと、永遠の生命を信じている。

次に

嗚呼吾、今にして初めて覚りぬ。吾は功名を急ぎたり。吾は一方に理想を仰ぎながら、功業を立つる事に急ぎぬ。

此事が如何に吾をして、静念精学・深思を欠かしめたるぞ

と、自分は功名を急ぎすぎたと強く反省している。

自分の一生は束の間である。成るなら成るであろう。成らないなら成らないであろう。凡て神のみ心にある。

神は今自分に学問に精励出来る境遇を与えてくれた。大いに独乙語の勉強をつづけ、英語に今一層精通し、支那書と和書を読みたい。

神よ。此等に於て吾を助け給へ。

嗚呼、吾退いて大に学ばん。起って叫ぶために、一生懸命勉強しようと神に祈っている。

収二から安着した報せが来た。今井君に手紙を書き、神を信じるべきを説いた。写真も送った。収二には印刷業が必ず成功するよう励まし、神にこのことを祈った。

十四日の記

自ら思ひ且つ感じぬ。左の如し。

此大自然の裡に生滅・生活・労苦・放吟する所の人とは何ぞ

此人間を囲む所の無際・無窮・光彩・暗影・整然又は冷然たる自然とは何ぞ。

と、人間・自然、これは何かと問い、その二つの関係について記してある。

人間はこの大自然を忘れて人間を考えることは出来ない。自然は人間を度外視してその何であるかを究めることは出来ない。人と云えば自然と答え、自然と云えば人間と答える。この不思議な両者の関係は果して何か。

神がこの両者の上に在はず。両者ともその御心から発し動き出したものである。

一軒の茅屋も一人の少女も、一人の乞食もどんなに小さく見えるものを、この大空の下に立っているものである。

つてもその意味はまことに大きく深いものである。かように考えてくると、歴史はわれわれに人類というものをもこの大空の下に見出さしめるものである。

と、記してある。

今日午後あまりに好天気であつたので、城山に登って遠望した。

大空の蒼々たる。遠山の紫煙を帯びる。近郊の青麦を敷ける。村落の山麓波提に割拠せる。若し夫れ四国方をふり向けは波浪・白帆・鳥嶋の美なる。或は樹梢に幽禽の鳴く、或は風と光とが灌木の枯葉みたる繁に交錯せる。凡て吾が懐に入らぬはなし。

と、山上の遠望をほしいままにし、その美しさを麗筆で描写している。

十五日の記

上帝は人を通じて、人を教へ、人を支配し、人を導き、人を罪し給ふ。

上帝は厳然として在ます也。人はいとも小なる者な

り。

と、神の御力について述べ、

しかし人は人を頼り人と一しよに立ち、支配し支配され、教えられ教え、導かれ導くのである。

神を力を通ずものはこれ即ち英雄である。故に英雄崇拜は真理である。

われわれは神を崇拜して真理を信じる。だからこの意味で英雄を崇拜するのである。

十七日の記に

今夜の衝突は吾に甚だ大いなることを教へぬ。曰く、決して自ら他人の前にて誇る勿れ、否な、かかる常套の語に非ず。曰く、決して自らを人間の前にて判断する勿れ。神の前に断ぜよ。人間の他の者と比較して自ら高くする勿れ。神の前に在る心地して常に神の前に謙遜なれ。

と、ある。この晩衝突して腹を立てて帰り、じつと自分で反省し、人の前で高ぶるな。神の前にあるように謙虚でなければならぬと自戒している。

この衝突とは、この晩益友会の会合に出席して、先日

の勧告書の件につき殊に矢野文雄氏を罵倒したというこ
とについて釈明しようとして、自分を壇上に立たしてく
れと頼んだが、幹事の者から断わられ、立つことが出来
ず、腹をたてて帰ってしまったのである。

この益友会というのは、佐伯の青年達の集会で、月刊
雑誌を発行し、また土曜の晩には集会して互いに討論し
合っていた。

この晩のことは富永日記にもある。

七時半益友会に出て見れば、会場寂として暗く隻影
なし。八時頃より人集まり夫より演説せり。先ず下川
敏夫・山口政策・山口行一君、行一君演説終るや、
起して演壇に顕はるるは石丸敏一、其演説として叫び
しは、会員諸氏に訴ふ。すは予が期したる折は来れり
彼は如何なる事を云ひて我等を攻むるか？彼曰く

今一人の教師と二人の生徒あり。而して奇妙なる勸
告書の教師の手に落ちし時、彼は之を一生に問ひしに、
一生之れを他生の所為なりと告げしと仮定せよ。之果
して友誼あるものとなすべきか。友の善を目のあたり
にはげまし、友の悪を面の前に責むること、親友たる
ものものなすべき事たれ、さるをそを直ちに其師に告ぐ

る。之れ実に如何ぞや。況んや其人にして其行なくば
其憤りや果して如何。古来歴史を按んずるに疑心ほど
人を殺し社会を毒せしものなし。然るに此疑心を挿ん
で漫りに人を上下するとはそも何事ぞ。或は国家の政
治を論じ、教育を論ずるものに告ぐ。さる大なる経綸
となすよりも乞う先ず自家の疑心を払へ。と。

咄何たる事ぞ。我を以て彼は一介の奸物となすか。

国木田へ態々告げしものとするか。汝こそげに人を疑
ふの白痴にあらずや。我固より告たり。然れどもそは
国木田を師とし友とし爾を愛するよりも彼を愛するこ
との深ければ、我は其問に対して、汝が平素の性行を
告げたるのみ。よし我は告げしにせよ、汝果して告げ
らるる丈けの事を犯し来らずに思ふか。汝良心は咎む
る所なきか。咄咄、汝の性行は此疑を汝一身に蒙むり
尽くすも、尚ほ余りあるにあらずや。加えふるに汝は
矯風会事件に際して我等は殆んど絶交せんとするの言
を發したり。汝なほ吾人に向かつて友誼ありといふか。
只夫れ吾と汝が内には一つの好物ありて、両々相乖離
せしめんとせり。汝之を知らずや。汝は又我を猜めり。
我文章弁舌固より汝の如く麗沢滔々たらざるも、眼あ

るもの耳あるものは注目傾耳せり。汝が我に對する怨み半ば之に基せずとせんや。国木田師も我同志の土なり。汝我等が彼との密情を嫉むにあらざるや。我は今まで汝を賤しめたり。去れと汝をば決して悪まざりき。我はただ赤心を以て汝に對せせり。殊に前日曜に汝が言ひし詩といふを聞きてよりは寧ろ汝を憐み愛するの情充ちたりしなり。而して今や却て仇を受けてかくの如し。正者邪と云ふて邪となし邪者亦正をいふて邪となす。固より教の免れざる所、然れども只憐む。我を指して一個の好物の如く計られしを。ああ神は生く。正邪何時の頃にかは見分けらるるの時至らん。此世にも。

我は長き彼の演説を黙聴し、終りて直ちに立て、それとはなしに我が感情を述べ反駁せり。彼も終始首を低れて黙聴せしが、国木田師は我演説の中に会に入り来り、我演説終るを待ちて一言の許可を会場に問ひしが、委員逡巡して答ふる所なかりしに、国師たまりかねて左様に規則張ずとも可ならずやと云ふや、田川は烈しく答へたり。否々会内には規則あり。是非之を守らざるべからず。と、国師曰く余は規則の外に立たれ

んことを願ふ。人情に訴へられんことを欲すと絶叫するや、規則は一介の生物なり、本会の命脈の繋がる所なりと論じ、互に案を拍き目を瞋らして激論せしが、石丸は委員たるの資格にて終に開散せり。時十時、卑劣陋絶我云ふ所に加担して石丸を攻撃せんとでも思ひてか。可々。(以下略)

と、ある。
独歩が誤解を解くべく益友会に出席して、登壇の許しを乞うたが烈しく拒否されて出来なかつた。この後勧告書事件は尾を引き、いよいよ一層烈しくなる氣配を見せていた。

登壇を拒否され立腹して帰宅した独歩は、

茫々たり宇宙、漠々たり人事、玄又玄。吾が生命。

吾に一心あり、心は心を支配す。吾に一身あり、係はる所紛々たり。吾甚だ謬れり。何ぞ悠々として神意に適さざる。何ぞ落々として光明に歩まざる。

と、軽卒なことをしたと反省している。

ここで自分は人間のことを凡て知りたいと思う。人の心の変化、良心の苦しみ、災厄・失望・理想・信仰など凡て人間・社会・人の心の色々な状態を知りたい

と思う。

と、考え、また、

進歩とか進化の意味は何か、人間の理想とは、これらの言葉は美しい。すでに死んだ者たちの罪や不幸を何と解釈すべきか。

この世の人の運命とは偶然なるものか。

朝な朝な起き出でて、只だ空漠の夢を追ふかな。

さればとて生れし命、是非もなや

と、我身を振りかえって

神だけが只だ真の望みであり、道の基本で自分の命である。

と、神のみを頼みとしている。

この日の記には書いてないが、十八日の富永日記を見ると、

国木田先生が昨夜自分を訪ねて来たとのことが気にかかり、朝、寒さを冒して先生の寓居を訪ねた。先生はいつもと変らぬ顔色であった。昨夜のことを言うと先生は話した。

自分は真面目で率直であるのに、彼、石丸は沈んで陰険である。勢いこうであれば遂には衝突する。いやいや

実はとうとう衝突してしまったのだ。彼が服従しなければ感化しなければならぬ。自分は正義を盾にして進むだけだ。われわれは日本人でありまた世界の人である。

共に人類であることを考えると、まちまちの感情を抱いて狭い世の中で争う時ではない。昨夜益友会が散会して帰り道で前を石丸が行くので呼んだがふり返らない。五六回呼んだが知らぬふりをしている。それで傍まで行って何故返事をしないのかと問うと、田川と話し中であつたなど云う。自分がかつとなってもうこれまでだ、君と僕との師弟の交わりはこれで破れてしまったと叫んで帰宅した。しかし、これは自分の誤りであつたと話した。自分はこの話に心を打たれ、自分の至誠の足りないことを悔んだ。

と、ある。石丸は疑いをかけられたことを怨み、独歩に対し強い反感を抱いている。独歩はこれをほぐそうと石丸に声をかけたが取り合わない。この石丸の態度にかつとなつてとうとう師弟の関係はこれまでだと云つてしまったのである。しかし後で反省して後悔している。